

総合教育研究センター

学生向け情報誌

クレードル

17,18 合併号

CRADLE

Center for Research And Development
of Liberal arts Education

17th,18th issue

オーストラリアでの「森に生きる」はこうして始まった！

天理大学オーストラリア研修のあゆみ p.2

伊藤 義之（総合教育研究センター非常勤講師：前センター長）



すてきな感性

もっとよく見ること p.7

池田 華子（大阪府立大学高等教育推進機構：総合教育研究センター非常勤講師）

今も昔も同じですねw


100年前の「流行性感冒」を想起する p.8

山本 和行（総合教育研究センター）

「人生」ってなん年？

近時にあってはもはや稀にあらず p.10

小田 健（総合教育研究センター元教員）

 が落ちた!?

心の健康法14 ハプニングとともに生きましょう！ p.12

仲 淳（総合教育研究センター）

天理大学オーストラリア研修のあゆみ

伊藤 義之

総合教育研究センター非常勤講師：前センター長

2007年度	全学対象のオーストラリア語学研修スタート
▼	▽
2011年度	オーストラリアでも「森に生きる」スタート
▼	▽
2015年度	森に生きる(オーストラリアコース)正式科目に
▼	▽
2019年度	コロナ禍でのオーストラリア研修

全学対象のオーストラリア語学研修スタート

天理大学の伝統の一つに「語学の天理」があります。天理の語学教育は他大学にさきがけて始められ、成果は広く認められてきました。今や国際化、グローバル化が叫ばれる時代となり、語学能力は外国語を専門に勉強する学生だけでなく、全学生の必須能力の一つとなりました。こうした時代の要請から国際文化学部言語教育研究センター(当時)は2007年、全学生が受講できる海外語学研修を提案しました。全学協議会に提出された提案書を見てみましょう。

日本では国際化への要望が叫ばれ、国際理解をもち国際参加の態度を身につけた人材の育成が強く求められるようになってきている。本学では世界的規模での人類文化の創造への積極的参加を志向する人材を養成するため国際文化学部を中心として文化実習や国際協力実習など様々な形で努力をしてきている。

そのような人材養成活動をさらに強化するには、学生に外国語の習得はもとより異なる価値観や視点から学習することを通じて異文化理解を深め、視野を広げて地球的規模で物事が考えられる基礎を培う必要がある。

そうした機会は、国際文化学部の学生には与えられているが、他の学部学生がそのような機会を得るには、今は業者に頼るしかない。だが、学部改革前には学生自治会主催によるハワイ大学における語学研修が実施されていた経緯があり、そのような語学研修を提供してもらいたいという学生からの要望もある。

(以下略)

この提案は全学協議会で承認され、天理大学はオーストラリア第3の都市ブリスベン市にあるグリフィス大学（天理大学の姉妹校）に毎年、全学部の学生を短期語学研修生として送り出してきました。

オーストラリアでも「森に生きる」

一方、総合教育研究センターでは奈良県の吉野の森で「森に生きる」という科目を2004年に始めました。これは森の中での生活体験や林業作業を通じて、自然や世界との「いのちのつながり」を共感し、「この世は神のからだ」といわれている教えを学びとることを目的とした科目です。この科目も全学の学生を対象としており、毎年様々な学部、学年の学生たちが参加してきました。

二つのセンターの中に、それぞれ開講してきた科目の成功をもとに二つの科目を組み合わせようという機運が生じてきます。まず当時の言語教育研究センター長が吉野の「森に生きる」に参加し、次いで総合教育研究センター長（筆者ですが）がオーストラリアの語学研修を見学に行きました。そして、新たにオーストラリア研修を「語学研修+森の活動」に広げることが可能であるとの共通認識を持ちました。



左:太田耕軌先生（言語教育研究センター長=当時、以下同様）

中央:インゲボーグさん（グリフィス言語センター責任者）

右:筆者

このとき私がオーストラリアに出張したのは、単に語学研修を見学するだけでなく、学生を連れて行くなら具体的にどのような森の活動ができるのかを探るためでもありました。ブリスベン市にある天理教オセアニア出張所にも協力してもらい、クイーンズランド州政府の森林を管轄する保安員(レンジャー)たちと話し合いを行って具体的な計画が進展し、いよいよ実施が現実のものとなりました。

オーストラリア版「森に生きる」スタート

語学研修と森の活動を組み合わせた形での記念すべき第一回「オーストラリア短期研修」は 2011 年の 8 月に実施されました。語学みのコースと語学+森の活動の組み合わせのコースの二つのコースが用意されましたが、この年あとのコースに参加した学生は二人だけでした。一人は人間学部臨床心理専攻の 1 年生、もう一人は中国語を勉強する国際学部地域文化学科の 1 年生、いずれも女子学生でした。たった二人でしたが、これをきっかけにこのあと彼女たちはアメリカ、ニュージーランド、中国などに活躍の場を広げ、ホームステイや留学を経験することになります。



第1回オーストラリア版「森に生きる」の様子

レンジャーにレクチャーを受けている参加者たち

初年度には二人だけだったオーストラリア版「森に生きる」の参加者が、翌 2012 年度には一気に 7 人の参加を数えます。そのうちの一人は前年度に参加した学生のリピート参加でした。また一人はカナダからの短期留学生でした。カナダ人の彼女はもちろん英語は堪能ですが、日本人とともに行う合宿生活が自分の日本語の語学能力にプラスになると考えて参加したそうです。その後も 2013 年度 9 人、2014 年度 9 人と安定した参加人数になったため、2015 年度からは当初からの計画通りオーストラリア版「森に生きる」を正式科目にすることにしました。

「森に生きる(オーストラリアコース)」正式科目に

2011 年度から始まったオーストラリア版「森に生きる」は、はじめのうちは参加する学生数の見通しが立たなかったために単位が付与される正式科目とはなっていませんでした。しかし、毎年コンスタントに参加者が増えてリピーターも出てきたことからかねてから考えていたとおり、正式科目に「格上げ」することになり、2015 年度入学の学生から単位が付与されることになりました。同年度に私がセンター長として全学協議会に提出した「オーストラリア短期研修」の実習計画から「1. 趣旨」を抜粋します。

言語教育研究センターでは 2007 年度より全学部学生を対象としてオーストラリア短期語学研修を実施してきました。これは、オーストラリア・ブリスベンにあるグリフィス大学にて 1 週間（30 時間）ないし 2 週間（60 時間）、集中的に英語を学ぶ機会を学生に提供するというものです。また、2011 年度より新たに総合教育研究センターによる「オーストラリア版森に生きる」と題した、現地での生物多様性に触れながら森林保護活動を体験するコースを併設しました。これにより学生は、語学研修と自然体験のいずれか、または両コースを組み合わせたプログラムに参加が可能になりました。

本年度は「オーストラリア版森に生きる」が正式科目になり、2015 年度入学生からは「森に生きる(オーストラリアコース)」という科目名称となって参加者に単位が付与されるようになりました。また、従来希望の少なかった語学研修の 2 週間コースを廃止し、A コース（語学研修 1 週間＋自然体験 1 週間）と B コース（自然体験のみ 1 週間）の 2 コースを提供することになりました。A コースの学生は、第 1 週目にホームステイをしながら語学を学び、第 2 週目にオーストラリア特有の亜熱帯雨林の現状を見学し、現地の森林保全の専門家（レンジャー）の指導を受けながら地域の生態系に悪影響を及ぼすランタナなどの外来植物を駆除したりユーカリの植林を行ったりする森林保全活動を行います。B コースは森林保全活動を 1 週間行います。

これによって以降の参加者には単位が出ることとなり、研修に参加する学生は英語に関する単位と教養科目の単位の最大 2 単位が取れることになりました。2015 年度以降、リピーターや留学生を含めてコンスタントに 10 人前後の参加者があり、2019 年度にはこれまで最高の 13 人に上りました（うち 1 名のちに辞退）。なお、2018 年度末に大学組織の改編があり研修の共催者、言語教育研究センターが廃されたため 2019 年度からは総合教育研究センターと国際交流センター室の共催となっています。



2015 年度

左:森本さん(国文3年生) 中央:エレーンさん 右:山田さん(歴史4年生)

コロナ禍でのオーストラリア研修



2018年度 左:奥村さん(体育3年生) 右:ブラッドさん

2011年度の第1回研修を除いて、オーストラリア研修は毎年2月に行っており、昨2019年度の研修も2020年2月実施で計画を進めてきました。そこに新型コロナウイルスのパンデミックが起きました。天理大学でも予定していた多くの実習や留学を中止しましたが、オーストラリア研修は実施時期が迫っており、相手国や大学も受け入れを

認めていたことから、ぎりぎりの決断で実施することになりました。旅程は2月8日出発、2月23日帰国でした。日本でもオーストラリアでも混乱が始まっていた時期でしたので、実施予定があと1週間遅ければ確実に研修は中止になっていたでしょう。直前にホームステイ先が変更になったり、参加を取りやめたりする学生も出ましたが、何とか予定通りの研修ができ帰国直後にオーストラリアはロックダウンのため海外との往来ができなくなりました。

私は第1回の2011年度から2019年度まで、すべてのオーストラリア研修に参加してきましたが、本年3月で職を辞することとなり2020年度は担当者が新しくなって8月に実施が予定されていました。しかしながら、他の海外研修、留学等と同様にコロナ禍で実施は中止となり、2021年度は担当者の都合がつかないために現在実施の予定はないと聞いています。

この研修の意義は外国語を学ぶ学生はもとより、実習や留学のプログラムを持たない学部の学生たちにも、グローバル化した社会に対応した能力、心構えを身につけてもらうことにあります。これまでこの研修に参加した学生たちは、研修をきっかけに多く海外に雄飛しています。一人で海外に行くのは少し不安だしハードルが高い、業者の留学は経済的に負担が大きい、などの「海外初心者」の学生にとって全コースに教員のエスコートがついたこの研修は海外体験第一歩として大きな役割を果たしてきたと言えます。

最後に頼れるところがあれば、一人ではできない冒険も勇気を振り絞って挑戦してみることができます。内外の状況からみて今後の見通しがなかなか立たないオーストラリア短期研修ですが、天理大学の学生に一步踏み出す勇気を与えてきたこの研修の存続を願いながらペンを置くことにします。

もっとよく見ること

池田 華子

大阪府立大学高等教育推進機構：総合教育研究センター非常勤講師

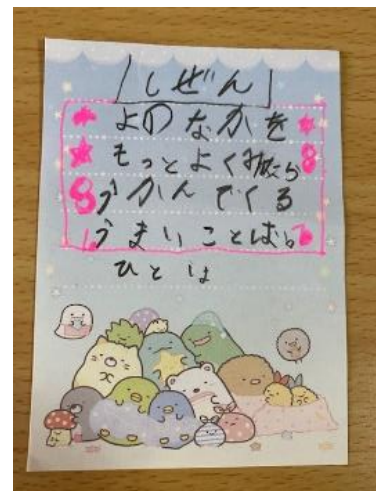
2020 年は新型コロナウイルスとの出会いから始まった年になりましたが、その 1 年もあと 3 ヶ月で終わろうとしています。皆さんはいかがお過ごしでしょうか？大学での対面授業も再開となりましたし、新しい生活様式にももう慣れたという人もいるかもしれませんが、残り3か月というこの時期だからこそ、一度立ち止まって、ここまでの時間をふり返るとともに、新しい年を迎えるための準備もしていけたら良いなと思います。

私とは言う、まだこの事態が始まったばかりの時期は、元々出不精なのもあって、自粛生活も大してストレスではなかったし、在宅勤務が可能となったお陰で、4月に入園・入学の時期を迎えた二人の子どもたち（彼女たちも学校が臨時休校になっていました）と家族で過ごす時間も増えて、悪いことばかりではないという前向きな気持ちで過ごしていました。

しかし、事態が長期化していく中で、「今日決めたことが次の日には、あるいは、次の週には、コロナの影響で覆されてしまう」といった出来事がいくつも重なり、次第に長期的な目線で物事を考えることが無駄に思えるようになっていきました。昨年から進行している仕事や、ルーチンワークの中には、コロナの影響に関係なく進めなければならない仕事もたくさんあるのに、何となく「全部コロナのせい」というような気分にもなって、思考停止しているうちに締め切りが迫ってきて焦ったり（皆さんもありませんか？笑）。時間の進み方も、いつもとは全然違った感じがします。

このような状況の中で、健やかに在るためには、規則正しい生活、そして前向きな気持ちが重要なのだと、先日とある新聞記事で読みました。確かにその通り。でも、それができれば苦労はないよね、と少し意地悪な気持ちになった自分もいます。自粛生活も悪くない、一度立ち止まって、自分のあり方や社会のありようを捉え直す良い機会じゃないか、なんて思っていた春先の私と、今の私は、明らかに何かが違います。秋の訪れとともに、少々感傷的になっているだけかもしれませんが。

そんな日々のとある夜。小学 1 年生の娘の机の上に、小さなメモ書きを発見しました。「よのなかを もっとよくみたら うかんでくる うまいことば」。何のことだろうと思ったのですが、すでに寝ている娘に尋ねるわけにもいかず、しばらく眺めていたのですが、そのうち何だか今の状況ととてもつながってきて、そうだな、よく見ることって大切だなとしみじみ思えてきました。ありきたりな言い方ですが、必要な

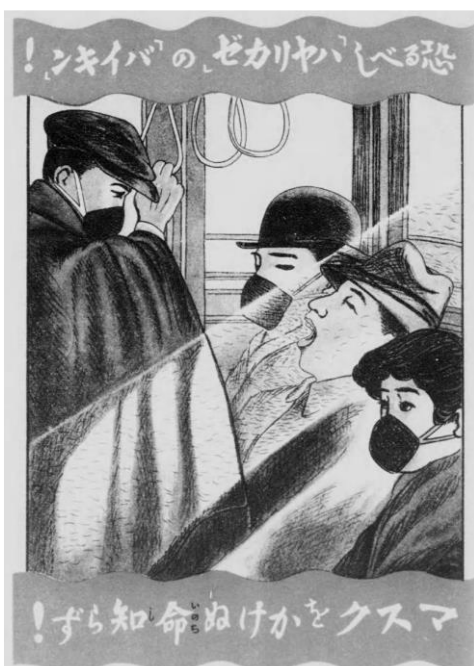


答えはいつだって意外と身近なところにあって、大切なのはそれに気付くことができるかどうかなのでしょう。よく見て、耳をすまして。そうすることで、今の自分、明日の自分を支えてくれる「ことば」に出会える。そこから思いもかけない「うまい思いつき」が生まれることもあるでしょう。今年の残り 3 か月は、心を落ち着けてよく見ることを大切にしながら、どんな状況の中でも訪れる新たな日々を、希望を持って迎えらるるようになりたいなと思っています。

写真が娘のメモ。（掲載許可は得ています。）

本人曰く、元ネタはアンデルセン童話の「うまい思いつき」というお話だそうです。そのお話の中の一番いいところを詩にして残したとのこと。「うまい思いつき」自体、とても面白いお話なので、興味のある方はぜひどうぞ。

100 年前の「流行性感冒」を想起する



山本 和行 総合教育研究センター

ここに挙げた 3 枚の絵は、1922 年に日本の内務省衛生局が出版した『流行性感冒』に掲載されたものです。1 枚目は「恐るべし「ハヤリカゼ」の「バイキン」！／マスクをかけぬ命知らず！」、2 枚目は「「テバナシ」に「セキ」をされては堪らない／ハヤリカゼはこんな事からうつる！」、3 枚目は「含嗽（うがい）せよ、朝な夕なに」と書かれていて、いずれも「流行性感冒」「ハヤリカゼ」に対する予防（うつらない・うつさない）の大切さを訴えています。

ここでいわれている「流行性感冒」とは、1918 年から世界的に感染が拡大し、当時は「スパニッシュ・インフルエ

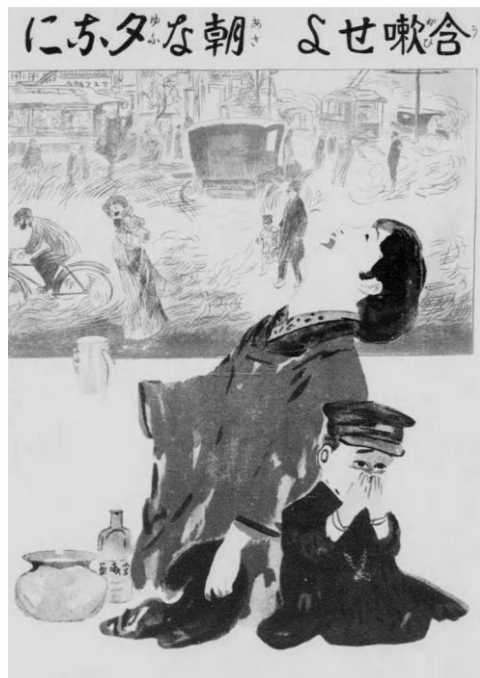


ンザ（スペイン風邪）」とも呼ばれた新型インフルエンザのことです。日本でも 1918 年の夏ごろから感染拡大の兆候が見られ、1920 年までに 3 度の大きな感染の波があり、日本国内だけで約 2,300 万人が感染し、約 38 万人が死亡したといわれています。

このときの新型インフルエンザのパンデミック（世界的大流行）は当時の人々の生活に大きな影響を及ぼしましたが、その後、歴史的な「事件」としては忘却の彼方に追いやられていました。

ところが、今年の新型コロナウイルスのパンデミックによって、ふたたび多くの人々の注目を集めることになりました。ここに挙げた 3 枚の絵に描かれている内容は、表現の方法こそ違うものの、今、わたしたちが「新しい生活様式」として求められていることそのものです。わたしたちの生活環境も、闘うべき「ウイルス」も、100 年前と今ではまったく違うにもかかわらず、人々が求められる「生活様式」は同じというのはなかなか興味深いことです。「人を介して広がる未知のウイルス」に対処しながら社会生活を営んでいかなければならないという点では、100 年前の人々も今のわたしたちも同じなのかもしれません。

100 年前の「流行性感冒」からわたしたちは何を学ぶべきなのか？歴史研究者の藤原辰史さんは、「パンデミックを生きる指針—歴史研究のアプローチ」という文章をまとめて、そのひとつの方向性を示しています。ウェブ上で読むことができるので、関心のある方はぜひ一度読んでみてください（QR コードを貼り付けておきます）。そして、今、わたしたちはまさに「歴史」のうえに立っているということを感じてもらえたらと思います。



近時にあってはもはや稀にあらず

小田 健 総合教育研究センター元教員

私もこの九月で 71 歳になった。古稀（杜甫の詩「人生七十古来稀なり」から、70 歳を意味する言葉として現代日本でも使われている）をすでにオーバーしたわけだ。ところが、実際に自分がその歳になってそれが「稀」かと言うと、あにはからんや、同じくらいの年齢の人（男女を問わない）はいくらでもいるし、しかもその多くが元気いっぱいである。まあそうだろう、「超高齢化社会」、「人生百年時代」などと言うくらいだから、70 などまだ小童（こわっぱ）、大口をたたくんじゃねえと喝破されて、敬老会の末席で縮こまっているのが分相応かもしれない。

それはそれで結構なことであるが、この高齢化社会での小童にもさほど結構ではない部分もある。

70 歳というと、政治家や医師、弁護士、財界のエリートなどを除くと大体がリタイア（退職あるいは引退）するタイミングのはずである。リタイアすると、それまでは朝定時に起きて朝飯をかき込んでのち、始業（私の場合で言うと一時間目の授業）に遅れないようあたふたと自動車を運転したり、駅まで早足で滑り込むというのが日常であったのが次のように変化する；「さあ、君は今日何をしようと自由である。大いに楽しんでくれたまえ」というご託宣が起床と同時に聞こえてきて、さあどうしようかな、今すぐ起きようかな、もう少し寝ていようかなてなことをぐずぐず考えながら、結局 1 時間ほど布団の中で思案して髪の毛をかきむしりながら階段を降りていく。朝飯食って朝刊読んで・・・しかし、そのあとどうするね。一日は 2 時間や 3 時間では終わりませんよ。「いいじゃありませんか、あなたは自由なんだし好きなことを好きなだけやればよろしい」。そのとおりで、好きなことは 70 年間で大体やり終わったし、好きなだけやるには体力がもたない。何をやればいいんだ、残りの 10 何時間。

要するに、平たく言うと時間をもてあます、自由をもてあます、ある意味での「贅沢病」が高齢者初心者の屈託の種となっているのが現状である（ことを痛感した）。それこそ、何を贅沢な、とお叱りを受けそうだが、実は高齢者のかなりの部分がこの病に苦しんでいると思われる。だからこそ、いささか軽薄な駄洒落であるが、「教育＝今日行くところ」、「教養＝今日用がある」の二つを確保するのが老後を生きる秘訣であるなどと言われるわけだ。

自由というものは、別に老若男女を問わずかなり人間にとって難儀な状況であって、極端な話、ナチズムのヒトラー独裁を生み出したのも、ドイツ国民が自由の「重み」に耐えかねて、むしろ自らを規律してくれる権力を待望したと分析した学者もいるくらいなのである（E. フロム『自由からの逃走』1941）。ナチズムの例は極端にしても、この自由のおかげで反って心身を害する人々の多いことは、毎日のニュースでも報道されているところである。

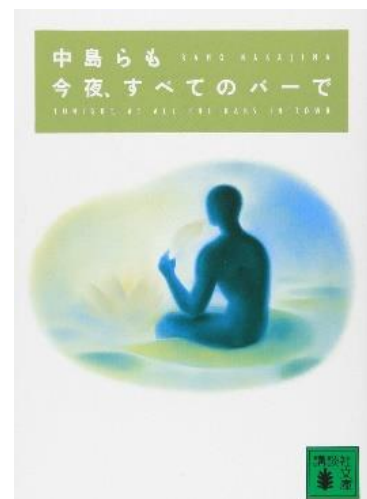
心身を害すると言えば、まず浮かぶのが酒である。実際、かの杜甫の詩は、70 歳を過ぎて日々好きなだけ酒を呑むことの口実に使われているようである。朝から酒か。自由なのだからいいじゃないか、となりそうだが、今この原稿を書いている最中にも、某芸能人が朝から飲酒で事故を起こしたニュースが流れている。これはよろしくない。「自由」から酒に逃走したのでは洒落にならない。さてどうするか。

私はここで、今は亡き中島らも（1952～2004）の名著『今夜、すべてのバーで』講談社 1991 年から私のお気に入りのおくだりを引用して、自らのいましめとしつつ、らもの文章が単に酒の問題にとどまらず、自由というもののものもつ普遍的な危うさを巧みに描き、酒とは縁のないはずの学生諸君への指針にもなりうることを老翁心ながら付言して締めとしたい。

「アル中の要因はあり余る「時間」（中略）平均寿命の伸びと定年の落差も膨大な「空白の時間」を生む。

「教養」のない人間には酒を飲むことぐらいしか残されていない。「教養」とは学歴のことではなく、「一人で時間をつぶせる技術」のことでもある・・・」

（文庫版 131～132 頁）



心の健康法 14

ハプニングとともに生きましょう！

仲 淳 総合教育研究センター

2020年。令和2年。今年はみなさんにとってはちょっと記憶に残る年になるかもしれないですね。いよいよ東京オリンピック！と思っていたこの年に、全世界を巻き込む感染症が発生しました。対処法がわからないので、世界中が大騒ぎになって、まさに世紀の大ハプニングですよネ。。。

でもその「ハプニング(happening)」という言葉、実は、「幸せ(happiness)」という言葉と語源は同じで、元の言葉は happen。「たまたま起こる」という意味なのです。つまり、幸福(ハッピーなこと)もハプニング(事故や災厄)も、あらかじめ確かにわかっていることなのではなくて、いろいろなことが巡り巡って、不思議なこととして、起こってくる(向こうからやってくる)ものなのですよネ。。。

生まれてきたら、Happy Birthday! ということでお祝いをするのですが、一人の人が生まれてくるというのも、一つのとんでもない奇跡であり、ものすごいハプニングだともいえるわけです。

生きてると、次から次へと予想しないことが起こってきます。そしてその出来事の意味は、後でしかわからないことがありますし、もしかしたら死ぬまでわからないことも多いのかもしれない。

ニュートンが万有引力の法則を思いついたのは、その昔にペストが流行ってみんなが田舎に疎開して、引きこもって避難していたときだったのだということです。コロナ禍も本当に大変ですが、また新しいなにかが生まれる一つのきっかけになるのかもしれない。みんなでちょっと引きこもりつつ、心の火を灯し続けながら、なるべくうまくこのハプニングをしのいでいきましょう!!!

